

第二二 信仰心を持って

この檀家制度も崩壊の道をたどっています。それは社会の仕組みで田舎の人口が激減し、人口は大都会に集まつてしまいました。故郷の寺院は経営難に陥ち、廃寺とかしていきます。そして田舎にある先祖の墓は苦むし墓終いとなります。都会に住めば、信仰も家の宗教から、個人の自由と成り易く、御先祖から伝承されてきた菩提寺から止む無く、離れてしまうのです。仏教も骨を金で集める寺が出て来るようになります、もはや教えは最早重要では無くなってきました。止む無く、その場がシノグレバ良いと言う人々も増加し、寂しい限りです。我々の死後は気お付け無いと荷物的扱いとなり、残された子孫は墓も仏壇も必要が無くなり、

徳川約三百年を築いた家康は源信の「往生要集」から「厭離穢土・欣求浄土」を掲げました。戦国の世は何時命終を迎えてしまうかもしれない戦乱の世でした。これは一遍上人が開かれた常に死を前提にした念仏が大切であると説く時宗の教えです。一日一生の思想は大切ですが余りにも強烈で死ばかりが覆いかぶさり余裕の無いのが現代では受け入れがたいのではないかと私は思います。 靈元丈法師は 仏教では

お釈迦様は覺りを得て初めての説法で「苦集滅道」を説かれました。苦の解決方法として八つの正しい道（正思・正見等）を守ることを勧められました。苦の多くは煩惱が占めます。昔から少欲知足と申します。何事も程々に身の丈に合った希望の下に生活するのがよろしいかと思えます。高田好胤師は

物で榮えて心で滅びる。眼に見える物の世界と、眼には見えない心の世界が共に調和する事が必要である」と申されました。仏教徒とはお釈迦様の教えを信じ実践する人です。各宗派の祖師の師匠も勿論お釈迦様であり、お釈迦様の弟子という事に成りましよう。そして又、私共もお釈迦様の弟子と言う事になります。尊い事です。

二十九 年九月 一日

善壽界善入院油掛地藏尊